

ル参加は私の宝である。授業はもとより、学生とのコンパ、スポーツ観戦、観劇等枚挙に遑が無い。家族的な教室を母体に主任、学部長等の任につかせてもらった事を含め、先輩、同僚、後輩の方々に只管感謝するのみである。

私にとっては「人生は歩く影法師、あわれな役者だ。束の間の舞台の上で、身振りよろしく動き廻ってはみるものの出場が終れば、跡形もない…」(マクベスV)ではなく、人生は舞台、恵まれた役者だ、身振りよろしく動き回って、よき思い出とともに、今出場を終える。

益々の発展を祈念しつつ、感謝しながら退場することにしよう。

滝先生の退職に際して

梅原敏弘

つい2、3年前に熊崎先生を定年退職で送り出したと思ったら、もう滝さんを送り出す番になってしまいました。本当に月日のたつのは早いものです。滝さんとは26年間も一緒に仕事をしてきましたが、この26年間もほんの束の間という感じさえます。

思えば、私が駒澤短大英文科の専任になった頃は女性の専任の先生が3人おり、我が短大も女子短大の印象が強く、失礼ながら、最初は教室会議でもあまり発言しない滝さんの印象はそれほど強いものではありませんでした。滝さんの人となりを知るのには多少の時間が必要でした。それというの、昼間の滝さんだけでは滝さんの人柄を知るのには十分ではないからです。滝さんを理解するには教室会議以外の時間と場所の設定が必要だったからです。

その時間と場所とはいうまでもなく「夜」であり、「酒席」であります。「稀代の酒飲み」だという噂は時々耳に入っていましたが、それが単なる噂ではなくなるような機会が何回か訪れるようになって、初めて滝さんのシ

エイクスピアに対する思い入れの強さを知り、また滝さんが英文科の教師という仮初の？姿の背後に幼少の頃から身につけた広くかつ深い仏教的教養と知識の持ち主であることも知るようになったのです。

その後主任となり、学部長になるにつれて、昼間の部においても、滝さんの人となりが自ずと出てくるような機会が増えました。日常の会話ではどちらかというとい口数が多いほうでもなく、ユーモアを連発するほうでもないのに、学生の卒業や入学の際のスピーチとなると普段の滝さんとはがらりと変わって、突然雄弁となり、学生の心を捕まえて離さない、情熱的な語り口となるのです。この豹変振りに最初は驚かされましたが、これも酒席で鍛えた技かなと思いつつ、次はどんな話をするのかなと次のスピーチを楽しみにするようになりました。もうこうした楽しいスピーチを聞く機会も無くなると思うと一抹の寂しさを感じます。

先日、辞書を引いていましたら、滝さんにぴったりの言葉が見つかりました。今の若い人たちには馴染みの無い「酒仙」という言葉です。三省堂の大辞林には次のような説明が出ていました。

しゅ-せん 【酒仙】

世間の雑事にとらわれず、心から酒を好み楽しむ人。また、大酒飲み。

これはまさに滝さんのためにあるような言葉です。これからは大学の雑事に煩わされることもありません。雪深き山形の地で、世間を超越し、心ゆくまで酒を飲みつづけ、さらに滝節に磨きをかけて下さい。たまには上京し、その変わらない酒仙振りをまた我々の前に見せてくれることを願います。

滝さんのこと

岡本 誠

私の友人に女子大に勤務しているものがある。学生は言うに及ばず同僚の先生達も女性。家に帰れば奥さんに二人の娘さん。「おれんちは猫までメスときてるんだ」と彼はぼやきながらもまんざらでもなさそうに言う。

私も少々そういう環境に昔はあった。私が短大英文科の専任になったときは女子学生に加えて、竹内・山田・熊崎という三人の女先生がおられ、さらに助手の女性までいた。毎日花に囲まれていたようなものである。

しかし、いいことは長く続かない。そういう生活は突然破られたのである。その頃英文科というか英語関係を一手に牛耳っていた中島という先生が「今度こういう人を英文科に入れます」とのたまわれ、そして四月になって登場したのが滝さんであった。滝さんはニコリともせず、というどころか、「野盗荒野を走る」といった趣のギラギラした目をしており、私は花園で突然野武士に出くわしたように感じた。

ところが年数がたち、同僚として長らく接しているうちに例のギラギラ目が同じ目のはずなのに柔和になっていった。

滝さんは本学ご出身ということで学内のことによく通じておられ、会議のときなど殿中のものが家老に伺うように、なにかと我々は滝さんの大御所的な一言を期待するようになっていった。

これからはそういう一言が得られなくなり、寂しき限りである。この上は健康に留意され、ということは酒はほどほどに、ということであるが、今後も我々をギラギラと優しく見守っていただきたいものである。

滝先生の思い出

高野秀夫

滝先生との初めての出会いは、まだ懐かしい旧本館校舎があり、学生数が激増した時代でした。3階建の大学院の新校舎ができ、私は滝先生と2回生として机を並べました。いろいろな夢を語りながらの大学院生活ですが、先生は当時、駒沢女子高等学校の専任教員で、毎日二足のわらじを履いて、大変忙しい日々を送っていました。“文学とは何事も経験が大事である”を持論に、恩師の中島関爾先生からシェイクスピアを学び、それ以来一貫して演劇を研究され、同じくシェイクスピア専門の駒澤大学の石原孝哉先生、荒井良雄先生達と一緒にシェイクスピアフォーラムを設立し、東洋と西洋の演劇文学を研究され、シェイクスピアと狂言についてのご本を出版されました。

駒澤短期大学に勤めて以来、ずっと大学の顔として活躍されて来られました。お体も丈夫で、同僚の信望も厚く、英文科の学科主任、短期大学部長を4年間勤め上げました。その間、放射線学科が駒澤大学の一学部になりました。また、駒澤大学出身で、大学にて教鞭を執られている先生方の集まりである「駒澤大学信誠会」の会長を長い間勤めて、公私に渡りいろいろ幅広くご活躍されて来られました。

お父様がお亡くなりになった後は、山形のお寺を継いで、山形と東京を飛行機で往復され、二足のわらじを履く生活を続けて来られました。何事もけじめを付け、他人に迷惑をかけることなく、きちんとやるべき仕事は見事に片付けて、人生を楽しむ術を心得ている先生の姿を見て、時にうらやましく思いました。

“小説や芝居をこよなく愛し、ダンディな滝先生。”これは、平成15年に定年退職された熊崎先生の「顧みて」の一節です。たまたま短大英文科資料室で過去の卒業生のアルバムを見ていましたら、若かりし頃のダンデ

ィな先生の写真が出て来ました。これが、滝先生の人生を楽しむ生き方であると思えました。また、再婚される時には、羽織袴で突然職場に現れ、私達教職員をビックリさせました。まさに“*All the world's a stage.*”「この世は全て舞台だ」を実践された観がありました。当時、竹内先生、熊崎先生、湯浅先生、事務の横山さんの4人の女性群で英文科資料室は大変和やかな雰囲気でした。時にダンディな滝先生が加わると、一層楽しく華やき、まさに笑いの絶えない資料室となりました。

駒澤の大学を愛し、甘えは許さないという厳しい姿勢を貫き通してこられた先生からは、いろいろなことを教わりました。本当にありがとうございました。

大学も少子高齢化社会の大波を受け冬の時代に突入した厳しい時期に、短大英文科の頼みの綱として活躍されて来られた滝先生が、いよいよ定年を迎えられ大学を去らねばならないことは、本当に私達、英文科にとって残念でなりません。

今後も平家物語、源氏物語、川端康成の日本文学への関心を深め、ウィリアム・シェイクスピア、オスカー・ワイルドの英文学を愛し、お酒を愛して、山寺の和尚さんとして静かに、いや、滝先生のことだから、にぎやかに過ごされることでしょう。ご健康には充分に気を付けて、悠々自適な生活を送られることを心より願っております。

滝先生、お元気で

湯 浅 陽 子

先日、短大英文科を卒業したあと、学部の英米文学科へ編入した学生が、「滝先生は今日来ておられますか？」と尋ねてきました。残念ながらその曜日は滝先生のご出講日ではなく、会えずに少しがっかりした様子で帰って行く彼女に「どうかしたの？」と聞くと、「近頃お会いしていないのでちよ

っと顔を見たかったので」と彼女はにっこり微笑みました。後日滝先生にそのことを申し上げると、「彼女は呑み仲間の一人」とのことでした。学生たちは滝先生のことを「タッキー」と呼んで時々一緒にお酒を呑むのだそうです。

今では短大英文科の恒例行事となっている毎年6月開催の「編入を希望する学生と卒業生との懇談会」(通称：編入説明会)は、もともと滝先生がお一人で始められたものでした。学生指導に熱心な滝先生は、卒業した学生ともずっと交流が続いており、懇談会に来て後輩に編入体験を話してくれる人材を探すのはお手のものでしたので、その会のことはいつも先生にお任せしてしまっておりました。昭和61年度に私は専任講師にいただきましたが、平成5年度頃から滝先生のお手伝いをし、懇談会の様子を記録に残すようになり、やがて私にお任せいただくようになりました。とはいえ、私は卒業生との交流を維持するような真似はできませんので、現在は高野先生や事務の横山さんのお力添えで何とか滝先生の跡を継いでいる状態です。

2年前に定年を迎えられて退職された熊崎久子名誉教授のお言葉をお借りすれば、滝先生は「小説や芝居をこよなく愛しダンディ」(熊崎久子「顧みて」駒澤短期大学英文科論集『英文学』第32号p.2)でいらして、昔から学生にとっても人気がありました。先生がいかにか好かれていたかは、卒業証書授与式の様子を見れば分かりました。滝先生の周りにはいつも学生がいて離れることがありませんでした。特に学部編入し更に英文学を学びたいと希望する学生にとって滝先生のご講義は非常に興味深いものだったでしょう。雄弁な滝先生の授業はとても面白そうで、もし可能であれば是非私も出席してみたいといつも思ったものでした。シェイクスピアを中心にエリザベス朝の演劇の研究を共有しておられた滝先生と熊崎先生は、お互いに連携する科目の『英米文学概論』(熊崎先生)と『英文学史』(滝先生)の講義内容や共通の問題意識を語り合われる機会が多かったように思います。その時の滝先生の語り口調はまさに人を惹きつけて止まないものでした。私が学生だった頃、英文学史がどうも好きになれませんでした。滝先生のように熱く英文学を語ってくれる授業であったなら、きっと英文学史が大好きになっていたに違いないと思います。

昭和54年3月に大学院を修了したばかりの私が、同年4月に駒澤短期大学英文科の非常勤講師として迎え入れていただきましたが、入ってすぐの頃

の思い出に滝先生のことの記憶がありません。おそらく先生は在外研究にお出かけだったのだと思います。私が非常勤講師在職中に先生の存在が急に身近に感じられるようになったのは、教え子で美人だったと聞く奥様を亡くされた頃からでした。その後、先生は男手一つで2人のお嬢様を見事に育て上げられました。

「老兵は静かに去るのみ」とおっしゃって、自ら幕を引いて教壇という舞台を降りようとされている滝先生ですが、山寺のある空気の澄んだ素敵な町で、今後は専任のご住職として、先ずはお元気で長く活躍されますよう祈念しております。